
ありがとう

桜坂 恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがとうございます

【Nコード】

N4826E

【作者名】

桜坂 恵

【あらすじ】

故郷・島根県益田での、中学校の同窓会。いろんな事情で、同窓会に参加するのは初めてだった雪子。雪子を、中学生の頃から、変わらぬ気持ちで、見つめ続ける聡。人生の岐路で、苦渋の決断をした雪子。その身の上を、遠く故郷から案じ続けていた聡。雪子と聡の暖かな気持ちのふれあいを、包み込むように、同窓会が始まった。

雪子・1

中国道を走るのは久しぶり。山陽道に比べると、カーブやアップダウンが多いけど、めったに混雑しないから、気持ちがいい。広島県の千代田ジャンクションから、浜田道で真っ直ぐ北へ。終点の浜田から益田まで、国道9号線が、日本海に沿うように延びている。

9号線に入った途端に、田舎に帰って来た気分になる。前に行く軽自動車は制限時速の40kmちょうどでトロトロと走する。イライラして抜かしてもムダ。次に追いつく車も、きつと同じ。益田までの一時間弱の道のりは、時折出会う海の景色を楽しみに、ゆったりした気持ちで走らなきゃ。

大阪から、6時間かけて帰ってきた。

私の故郷、島根県益田市。県の最西端の静かな田舎町。私はここで、生まれ育った。

《あつ、そこ・・・、その信号、左ね。》

駅前交差点の一つ手前の信号、ポプラの前で降ろしてもらった。

《そうそう、このあたりのコンビニは、全部ポプラなの。ローソンなんかないよ。》

（誰にも会いませんように・・・）

《じゃあ、ここだね。だいたい9時くらいかな？ うん、終わったらメールするね。》

数年前に出来たばかりで、まだ真新しいグリーンホテルのロビーに入ると、
聡君が待っていてくれた。

「ゆきっぺ？ゆきっぺか？」聡君は本当に飛ぶようにやってきて、私の前に立つと、
これ以上はないって笑顔で、

「遠かったろう？ようきたねえ、ようきたねえ。」と、私がちょっと恥ずかしくなる
くらいの大声で言った。聡君の顔が、サーッと赤くなるのがわかった。こんなにも
心待ちにしてくれていたのかと思うと、なんだか胸が、ジンとして、うれしかった。

「みんな、もうきとるよ。たぶん、ゆきっぺが最後じゃけん。こっち、こっち。」

「うん、わかった。ありがとう。」（でも大声、やっぱり、かなり恥ずかしい。

ほら、ロビーの人たち、みんな見てるよ）

聡君はそんな私の心の声になんか、全く気が付かなくて、「ゆきっぺが来たぞ」と
声をあげながら、会場に私を押し込んだ。

雪子・1（後書き）

最後までお読み下さり感謝いたします。全9回を予定しております。温かい作品にしたいと思っております。どうかぜひ最後までお付き合い下さい。なお、文中で【島根県・益田市の方言】を使用しておりますが、筆者不勉強により、若干言い回しに不備があるかも知れません。その方面にお住まいの方より、ご指摘、ご教授いただければ幸いです。

また、読後に、感想などお寄せいただけましたら、望外の喜びと存じます。

聡・1

聡・1

昨夜はあまり眠れなかった。

同窓会の準備は、もう全部済んだし、二次会のカラオケで何を歌うかまで、

ちゃんと決めたし、それでも気持ちが高ぶって、眠れなかった。

明日は、〈ゆきっぺ〉が来るから。

小さな田舎町の中学だから、同窓会は3クラス合同。ほとんど毎年のように

開いていたけど、ゆきっぺが参加するのは、今回が初めてだった。

ゆきっぺは、中学を出てから、商業高校へ進学した。卒業後、広島

島の会社に就職し、

何年か後に、社内結婚した。その後は、旦那の転勤で、あちこち引っ越しをして、

今は大阪で暮らしている。

会うことはなかったけど、ゆきっぺの近況は、毎年の同窓会や、地元のうわさ話で、知っていた。

〈ゆきっぺが離婚した。〉と聞いたのも、去年の同窓会だった。

それから、

ずっと気になっていた。離婚後の行方は、同級生の誰に聞いても判らなかった。

ゆきっぺは、中学・高校と、一番仲のよかった、しずちゃんにすら、

住所を教えてなかった。

今回の同窓会の案内は、実家を継いだお兄さん夫婦に届けた。自分で、直接持って

行つて、「今回は、ぜひ出席してほしい。」と伝言をお願いした。その甲斐あって、お兄さんがゆきっぺに勧めてくれたみたいで、「参加します。」と、

ハガキが返ってきた時には、大袈裟でなく、飛び上がるほど驚いた。うれしくて、

思わず、バンザイ、と叫んだ。

ゆきっぺのことは、小学生の頃から好きだった。中学の時には、一度だけ、手紙を書いた。拙いラブレター。ゆきっぺは、丁寧に戻事をくれた。

へお友達でいましょうへおかしな事に、それでもうれしかった。

ゆきっぺが一生懸命書いてくれた手紙は、僕にとっては、へたからものゝだった。

雪子・2

「わあ、ゆきっぺ。久しぶりじゃね。元気にしとった？」

「うん、元氣。」へ今の、えーっと、多田君かな？たぶん・・・違ったかなあ？」

「ゆきっぺ、来たね。よう来たね。」しずえが声を掛けてくれた。

「うん、来た。お久しぶり。元氣そうで良かった。」しずえの顔を見て、

やっと少しホッとした。小学校から高校まで、ずっと一緒に、今日集まった

同級生の中では、一番氣心が知れている。しずえとは、一昨年まで年賀状のやり取りもしていた。

一昨年。高校二年の長男と、中学三年の長女を連れて、あの家を出た。

夫の仕事中に、こっそりと、逃げ出すように。

夫の追跡を恐れて、住所は誰にも教えなかった。事実、数日の間に、夫は私の同級生の誰彼なしに電話をし、私の居所を捜し回った。お陰で、私の〈家出〉は瞬く間に、みんなに知れ渡った。

夫の所をへ逃げ出した理由は、いっぱいあるけど、直接の理由は、私に対する言葉の暴力と、長男への暴力。

夫は何でも自分の思い通りにならないと気が済まない性格だった。気に入らないこと（ほとんどが、些細なこと）があると、気が狂った様に、私を怒鳴りつけた。

元々、若いときから、短気なところがあつたけど、当時は、あまり気にすることもなく、2年付き合つて、結婚して・・・。

今思えば、「私、ほんとにバカだったなあ。」と思うけど。

歳と共に、夫の短気さはひどくなり、その上、しつこさが加わつた。訳もなく、大声で怒鳴りつけられる。でも、私は、何一つ言い返さず、何でもとにかく謝つて、じつと、夫の怒りが収まるのを待った。それは、子供、特に長男を守るためだった。

私が少しでも口ごたえをしたら、夫の怒りの矛先は、決まつて長男に向かった。

長男は、背丈はあるけど、細くて、腕力はあまりないから、大柄な父親に、力では、かなわなかった。

ある日、いつものように、夫が、大した理由もなく、私をひどく怒鳴りつけた。

その後、夫が風呂に入った隙に、長男が私のところへ来た。「お母さん、大丈夫？」

と言つた後、「あいつ、いつか殺してやる。」と言ひ足した。

《家を出よう》と決めたのは、その時。

聡・2

ずっと、ゆきっぺを見ていた。楽しそうに笑ってる。うれしかった。

昔からそうだった。ゆきっぺが笑っているのを見るのが、好きだった。

彼女の笑顔は、そう若くはない今でも、やっぱり可愛く見えた。

ゆきっぺは、中学の時から物静かだった。いつも誰かの話の聞き役で、自分のことや、自分の意見を、積極的に話すことはあまりなかった。小柄で、おとなしくかった。

クラスで席替えをする度に、僕はゆきっぺより、後ろの席になれるよう祈った。

決して隣に行きたいなんて、大それた事は思わなかった。ゆきっぺの後ろなら、ずっと、彼女を見ていられたから。

あのころ、僕は、ゆきっぺを見ているだけで、幸せだった。僕は今日、そのことを、大人になった自分の言葉で、ゆきっぺに伝えたかった。

中学の三年間に、ゆきっぺと話した回数は、実はそんなに多くはない。もっと話したいと思ったけど、僕はそれほど、話し上手じゃなかった。今もだけど。

こんなこと、女房が知ったら、どう思ふかなあ。

女房も同じ中学。二つ下だから、ゆきっぺのことは、直接には知らないはずだけど、

いつだったか、「農協の園田さんところ、娘さんが離婚したんだって。あんた、知ったった？」と言ったことがある。

別にどうと言うこともないのだけど、その時僕は、自分の顔が、赤くなったのを感じた。

座はどんどん盛り上がって、みんな思い思いに動き回って、あちこちに話しの輪が

出来ていた。そんな中で、ゆきっぺは最初に座った場所から動くこともなく、

しずちゃんや、近くの連中と話してばかりいた。

突然、誰かが、しずちゃんを呼んだ。「なにい？」と言いながら、しずちゃんが

呼ばれた方へ行った。ゆきっぺの隣があいた。僕はあわてて、その辺りにあった

誰かのグラスを持って、ゆきっぺの隣に移った。

雪子・3

「どう、楽しい？」 聡君が隣に来た。

「うん、楽しいよ。みんな、あんまり変わってないね。あつ、聡君は

ちょっと変わったかも。初めのあいさつ、上手だったね。」

私がそう言うと、聡君は、「そうか？」とすごく照れたように、頭をかいた。

その時、聡君の頭を見ると、少しだけど、うすくなりかけているのに気づいた。

「ゆきっぺは、全然変わらんね。昔のまんま。いつまでたっても、可愛いもんねえ。」

《聡君が、こんなお世辞言えるようになったんだ》私はすごく驚いた。

「わあ、ありがとう。聡君、照れずにそんなお世辞が言えるんだ。」
私がそう言うと、聡君は、また真っ赤になって、

「いやあ、お世辞じゃないって。ほんとじゃけん言える。そりゃ、ちっとは

シワも出来よったけど、ゆきっぺはまだまだ美人じゃけん。」

《あつ、シワって・・・。聡君、それは言っちゃだめでしょ。》

聡君は、自分では、失言に気付いていないみたいだから、私は、

心の声を口に
出したりはしなかった。

「子供達は？元気にしてる？」

「うん、元気。聡君のところは？」

「うーん、元気と言えば、元気じゃけど、親の言うこと聞かんで困る。」

「そんなの、うちも一緒よ。もう勝手ばかり。」

「そうか、一緒か。みんなそんなもんかねえ。」

「そうよ。」

「勉強もせんと、ゲームばかりじゃ。」

「あーっ、それも一緒。」

「そうか。ゆきっぺとこもか？なんじゃ、ちよつと安心した。」

「でも、私もゲーム一緒にするよ。」

「ほーっ、じゃあ、うちもやるかな。よし、明日さっそくやってみるわ。」

子供の話をしているときの聡君は、いいお父さんの顔だった。

聡・3

一次会は、六時から二時間半の予定にしていた。

盛況の中に、時間はあつと言う間に過ぎた。二次会は近くのカラオケボックスの

一番大きな部屋を予約していた。半数近くが二次会まで参加した。

ゆきっぺは、同窓会の後、大阪の友達と九州まで行くらしく、「一次会だけ」

と言っていたのを、シズちゃんが「久しぶりなのだから」と引き留めて、

二次会に引っ張って来てくれた。

カラオケ好きな連中が、自然と前の方に集まった。

ゆきっぺは、最初から、一番後ろの席について、シズちゃんや、他の2、3人と

話してばかりいた。

何を話しているのか、シズちゃんが大声で笑って、ゆきっぺもニコニコして、

とっても楽しそうだった。だから、勧められるままに歌った、僕の〈巡恋歌〉を、

ちゃんと聞いてくれていたかどうか、よくわからないけど、歌い終わったときには、

拍手はしてくれた。

一次会でゆきっぺと随分いろいろ話した。いや、あんなのは、普通、

〈ほんの少し〉と言うのかも知れないけど、僕には、とっても楽しい時間だった。

「ゆきっぺも何か歌えば？」そう言ってリモコンを渡そうとしたけど、

ゆきっぺは、へいらないって風に、手を振った。その時、ゆきっぺが

「ごめん、歌は苦手。」って言ったけど、僕はそんなことも知らなくて、

ちよっと寂しい気持ちになった。

リモコンは、すぐに他の誰かのところに廻って行き、僕はそのまま、

ゆきっぺの隣に座った。

「兄さんのところには寄らんのか？」

「うん、寄らない。友達が一緒だしね、時間もないし。」

そう言うのと、ゆきっぺはアイスオーレを一口飲んでから続けて言った

「聡君、ありがとう。今日、来て良かった。聡君が兄さんところへ、わざわざ連絡に行ってくれたでしょ。ほんとに、いろいろあったから・・・、

ちよっと、迷ったの。でも、思い切って来てよかった。すごく楽しいもの。」

僕は。ただへうん、うん」と頷いて、ゆきっぺの声を、聞いていた。

「さっき、しずえ達に聞いたよ。聡君が、私のこと、ずっと心配してくれてたって。」

家を飛び出して、きっと困ってるからって、何とか助けたいって、私のこと探して

くれてたことも、聞いたよ。ほんとに、ありがとう。」

「私、今、仕事にも恵まれてるし、元気にしてるから。大丈夫だからね。」

でも、聡君の優しい気持ち聞いて、すごくうれしかったよ。」

ゆきっぺの声が、心なしか震えていた。涙ぐんでいた。

僕はもう、言葉が出なかった。

ゆきっぺの目を見ることも、出来なかった。

雪子・4、 聡・4

【雪子・4】

私の知らないところで、聡君が、こんなに私のことを心配してくれていたなんて、本当に、うれしかった。

家を出てから、しばらくの間、本当に不安だらけだった。両親もすでにいなくなり、兄夫婦も自分達のこと、精一杯だった。誰にも助けてもらえないと思ったら、寂しくて、哀しくて、死んでしまいたいくらいだった。でも、子供達のことを思えば、そんなことは絶対出来なかった。

仕事が見つかって、職場の人や、友達が、何かと親身になってくれて、そのお陰で、今日までやって来られた。私は、ほんとにみんなに助けてもらったと思っている。そのことは、いつも感謝していたけど、ここにも、私の知らないところでも、私に手を差し伸べようとしてくれていた人がいた。そう思うと、なんだか、胸が熱くなつた。

へもし、聡君と結婚していたら、きっと幸せになれたろうな。こんな純粋な人と結婚した奥さんは、すごく幸せだろうなあ。そんなこと、ちょっとだけ思った。

「途中だけど、ごめんなさい。」そう言って、カラオケボックスを出たのは、十時前だった。二次会はまだ盛り上がっていた。しずえとは、「出来るだけ早く、また会おうね。」と約束した。

聡君が、入り口まで見送りに出てきた。
周りを見渡して、

「友達は、どこにいるの？夜遅いから、友達が来るまで、待つて
ようか？」と言った。

聡くんは、友達のことを、たぶん、〈女友達〉だと思っている。

「ありがとう。でも、大丈夫。駅前の方で待ち合わせだから。心配
しないでいいよ。」

「そうか、じゃあ・・・なあ、ゆきっぺ、何か困ったことあった
ら、連絡しろよ。」

俺、ゆきっぺのためなら、何でもする気にいるから。」

聡くんが真っ赤になりながら、そう言ってくれた。気持ちはずごく
うれしかったけど、

〈奥さんが聞いたら、怒るよなあ〉って思った。

「じゃあ、行くね。聡君、ほんとに、いろいろ、ありがとう。元
気でね。」

駅へ向かいながら、一度振り返ると、聡君はまだ見送ってくれて
いた。小さく手を振って、あとは振り返らずに歩いた。

【聡・4】

ゆきっぺは、一度振り返って、手を振った。そして、そのまま、
真っ直ぐ駅の方に向かって、歩いて行った。

ゆきっぺの元気そうな姿を見て、本当に安心した。実は、もっと
落ち込んで、疲れているんじゃないかと、心配していたけど、そん
なことは全くなかった。

〈ゆきっぺ、彼と一緒に来たんだろ？今度は幸せになれよ。その
役目が、僕でなくて残念だけど。〉

僕には、ゆきっぺの感謝の言葉だけが、心地良く残った。

雪子・5

〈省吾、きつと心配しているだろうなあ〉

急ぎ足で歩いた。省吾とは職場で知り合った。私が派遣されている会社の課長。

職場では、私たちの関係は、誰にも知られてはいない。彼も一度、結婚に失敗していた。

歳は私より二つ下だけど、あの一番苦しかった時、いつも側にいて、ずっと支えてくれた。

家を飛び出したあの日から、〈誰にも頼らない、頼りたくない〉と、意地を張って、頑張っているけど、省吾にだけは、安心して甘えられる。

出来るなら、省吾と一緒に暮らしたいと、この頃、思い始めている。でも、まだそれを私の方から、口に出す勇氣はない。

ポプラの前に、着いたのは十時を過ぎていた。〈9時頃〉って言ったのに、カラオケボックスが圏外だったこともあって、メールもしないままで、待たせてしまった。

助手席の窓から覗くと、省吾は、運転席を倒して寝ていた。

「ごめんね、すごく待たせて。」
ドアを開けてそう声を掛けると、省吾は、いかにも、寝ぼけた仕草

で、

「ん？おかえり。あゝ、よう寝た。」って何でもない顔で言った。でも、私にはわかった。居眠りした後の省吾の目は、ちよつと赤くなる。

けれど、今は何ともない。ずっと、起きて待っていてくれた。私が戻って来たのを見て、寝ていたふりを、したんだよね。

「どう？楽しかったか？」省吾が聞いた。

「うん、とっても。みんな、昔のままだった。」。

「そうか、楽しかったか。良かったな。」

省吾は、優しく笑って、頷いた。

「省吾、ごめんね。すぐく待たせて。」

「ん？何？いいよ。久しぶりの同窓会なんやから。二次会まで出たんか？」

「うん、二次会の途中まで。」

「なんや、せっかくやから、最後まで居てたら良かったのに。気にせんでええのに。」

「ありがとう。・・・省吾・・・」

助手席から、省吾の首に抱きついた。

「おいおい、どうした？何かあった？」

「ううん、何にもないよ。ただ、省吾に会いたかった。」

「なんやねん、変なやつ。」省吾は、私をちよつと抱きしめ、

「よし、今夜の中に、福岡まで行くぞ。」

そう言いながら、ウインカーを出した。

それから、いくらも走らないうちに、省吾が突然車を止めた。

「ユキ、言い忘れてた。この旅行から帰ったら、****。なっ。

「
《えっ、何?》横を通りすぎた、深夜便のトラックの音で、よく聞き取れなかった。」

「今、なんて?」私は、聞き直した。

「ああ、家を探そうって言っただけや。」
省吾は、そう言うと、また車を走らせた。

涙が込み上げてきた。
うれしくて泣くのは、今日二度目だった。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4826e/>

ありがとう

2010年10月26日03時57分発行